山椿

Yamatsubaki 84

Tomoo Kugisawa
釘澤 知雄（39期）

早いもので在会35年の表彰を受けた。振り返ると多くの師・先輩後輩そして友に助けられ充実した年月だった。

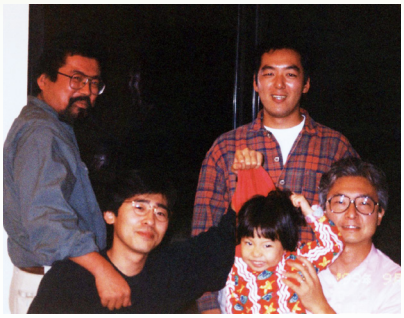
勿論最初から順風満帆だったとは言い難い。父（2期）も同業なので、門前の小僧で多少のアドバンテージはあるかと思い上がっていたがそんなに甘くはなかった。

開業早々受任した傷害事件では大恥をかいた。加害者の米国人青年に話を聴き示談書を作成して会いに行った被害者は初老の英国人だった。サインを求めると一読して「事実関係はよいが英語が拙すぎる」と修正し始めた。息子ほど年下の私を蔑むこともなく綺麗な筆致で直した示談書は簡潔・公正で文句をつけようがなかった。そのときは羞恥で満足に礼も言えなかったように思う。しかし教訓は胸に残り、後に後進育成にあたる際の礎となった。

事務所の先輩からも多くの温かい指導を受けた。中でも一番歳の近かった故岸和正先生（36期）は性格は大らかで仕事は緻密。甘え下手の私を酒席やカラオケ、ゴルフやスキー旅行に連れ出してくれる一方、近寄り難い幹部の先生方に代わり実務の手ほどきをしてくださった。先生からの書面の差戻しに育てられて今の私がある。御恩は忘れ難い。

父も同業と書いたが、実は珍しい名字で会派も同じため何処に行っても「ご子息ですか」「二代目ですね」と言われ困惑もした。その頃海外でチェーン展開するスーパーの破産事件を担当し米国出張したのを機に、父とは違う分野に仕事を広げたい気持ちが募り、開業6年目に米国に留学した。

ワシントンD.C.にあるアメリカン大学のLL.M.で学んだが、予想どおり英語で苦労した。電話帳ほど分厚い教科書を読み英語で討論する授業の予習に追われ、同行した3歳の娘と遊ぶ暇もない。その内に同じクラスで苦労している日本人と親しくなった。人懐こい髭面でニコニコと笑い、あと2人の日本人留学生を連れて毎週金曜日の膨大なペーパー提出を終えると必ず我が家に遊びに来るようになった。家内の作る日本食目当てで、娘が小さな手で包んだ餃子などを肴に4人で朝まで飲み明かした。奇遇にも家内と青学法学部同期だった髭男は当会の故大貫裕仁君（42期）。NY州弁護士と日大准教授となったあと2人も含め帰国後も家族ぐるみの付き合いは続いた。大学生になった娘がホテルで働きたいと夢を語ると餃子の御礼だと言って3人が力を貸してくれた。大貫君と最後に会ったのは娘が勤めるパレスホテルだった。



留学中の筆者（右下）と大貫君（左上）

「まもなく僕の事務所がお向かいに引っ越すから毎日会いに来るよ」といつもの笑顔で娘に笑いかけた。急ぎたくはないが彼が手ぐすね引いて待つ天上の宴も悪くはない。

弁護士としての35年の多くは事務所の先輩後輩の先生方と共に企業法務や株主代表訴訟などに取り組み、社外役員としての責任を全うしてきた。一方、法科大学院の仕事にも大きなやりがいがあった。指導した学生から合格の報を聞くのは我が事のような喜びで慣れることはない。更に顧問先の関係者や知人からの個人的な依頼で相談に乗ることも少なくない。こうした相談を嫌う向きも多いが、私は積んできた知識と経験が誰かの助けになるなら喜んで話を聴き足を運びたいと思う。それが35年私を導いてくれた人への恩返しになると思うからだ。